

異界から現れたもう一人の英雄たち…

淫乱にされてしまった英雄たち

フロイアーエムブレムヒーローズCG集

DEEPRISING

淫乱なもう一人の自分の姿に…乱れていく英雄たち

序章 もうひとりの英雄たち

異界…特務機関本部

異界の英雄たちを従えアスク王国へと侵略を続けるエンブラ帝国…
その幾度にも渡る攻撃を、
召喚士の協力により何とか凌いできたアスク王国特務機関
伝承に伝わる召喚士の力により
数々の「異界の英雄」達の力を借りることができ
崩壊寸前だった特務機関も
今では英雄たちで溢れ賑やかなものとなっていた

「それにしても隊長、最近はヴェロニカ皇女も静かなものですね？」

「そうね…これが嵐の前の静けさで無ければいいんだけど…。」

「何か企んでいるのは間違いないだろうね、
国境の監視をより強化したほうがいいかもしれない。」

特務機関隊長アンナ

アスク王国王子アルフォンス 王女シャロンの3人は
静けさを保つヴェロニカ皇女の次の企みに警戒していた

そんな中…特務機関に奇妙な知らせが届くことになる…

「えっ、英雄さんたちが…そんな場所に？」

「暗夜王国のカミラ王女と数名の方だとの報告ですが…。」

兵士話したと、カミラ王女と数名の英雄たちが国境付近の村に現れ
村人とトラブルを起こしているという

「そんなはずはないわ、私はずっとカムイと一緒にいたもの…
ねえ カムイ、エリーゼ？」

「はいっ、間違いなくカミラ姉さんは私と一緒にいました！」

「嘘じゃないよ、ちゃんと私も一緒だったんだからっ！」

疑惑に対しカミラ カムイ エリーゼの姉妹たちは潔白だと主張した

「ですよねえ、私もカミラさんではないと思います。」

「でも…見間違いとは思えないし…一体どういうことだろう。」

シャロンとアルフォンスもカミラとエリーゼがカムイと
決して離れようとはしないことを知っていた

豊満な乳房を揺らし抜群の美貌とスタイルを見せつけるカミラ…
一目見ただけでもその姿は鮮明に記憶に残るだろう…
まして何者かが簡単に変装できるはずもない

「何者かわからないけど私がこの手で殺してあげるわ。」

「カ、カミラ姉さん！そんなことをしたら余計に怪しまれるだけよっ！」

「たしかに、カミラ王女には
ここで他の英雄たちと一緒にいてもらうほうがいいわね。」

「あら、残念…この手で切り刻んであげたかったのにつ…。」

「……………」

「とりあえず誤解を解くために村には私たちで出向くことにしましょう。」

カミラ王女の無実を晴らす為、
その村へと向かうアンナ隊長とシャロン王女…
そこで想像を超えた光景が
彼女たちを待っていることはまだ知る由もなかった

エンブラ帝国との国境近く…人里離れた森の中にその村はあった
帝国との戦闘の中で何度かこの村附近でも戦闘になったこともあり
アンナ隊長とシャロン王女も何度か訪れたことのある村である

「アンナ隊長、村の人にどうやって説明するんですか？」

「人違いだって言うだけじゃ無理よね…
やっぱり…カミラ王女の偽物を捕まえるしかないわよね。」

「はあ、帝国が静かになったと思ったらこの騒ぎ…休む暇もありません。」

「これも特務機関の務めかしら…
ふうようやく村に着いたわ…だけど何か変ね…。」

村の入り口に立つアンナ隊長とシャロン王女…
しかし二人の視界には村人の姿はなく
帝国との戦争中だというのに警戒している様子もない
以前に訪れた時とはだいぶ様子が違っているようであった

「…誰もいないわね、カミラ王女の偽物に怯えて隠れているのかしら？」

「だとしたら一大事ですね、偽物を捕まえて早く安心させてあげないと！」

村の中へと足を踏み入れていく二人…

しかし…奥へと進んでいくと
次第に村人たちの騒ぐ声が聞こえてきたのだった…

「ずいぶん騒がしいけど…何をやってるのかしら？」

「ちょっと待って下さい…あれって…まさかっ!？」

二人が視線を向けた先には…
大勢の男たちに囲まれた「カミラ王女」の姿があった
しかも乳房を丸出しにし、男の上で腰を振っている…

「ああ、すごいわっ！ みんなもっと私を犯してえっ！」



左右に差し出された肉棒を夢中でしゃぶるその姿に唾然とする二人…

「カミラ王女居たわね…。」

「ええ、居ました…けど…

カミラ王女はこんな人じゃありません…あれは偽物です！」

「たしかに…カミラ王女なら妹のカムイと百合よねえ…。」

「な、なにを考えているんですかっ!？」



ああああっ！
すごい出てるっ！
まだよっ…もっど…
もっど私の中に出してっ！！

「あああ出てるっ！あなたの精液…私の中に出てるわっああ！！」

全身に精液を浴び、口内射精された精液を飲み込むその姿に
言葉を失う二人…

豊満な乳房を揺らし男たちに抱かれるカミラの姿は圧巻であった
2本の肉棒を同時に挿入させられ笑みを浮かべるその表情は美しく
まるで芸術作品を見ているような気分させられる

「すごいわ…これは特ダネよ！」

その様子に興奮したアンナは懐から魔導書を取り出した…

「なんですかアンナ隊長…それは…？」

「これは特殊な魔導書でこの光景を絵のように
鮮明に記録できる特別な魔導書よ…！」

「な、なにを考えているんですかっ！」

乱れたカミラの姿を記録に残そうとするアンナ隊長を
必死に止めようとするシャロン

「か、勘違いしないでくれるシャロン！
私は別のカミラ王女が存在している証拠を残そうとしているの！」

「そ…そうですか…たしかに、これは証拠になりますけど…。」

満面の笑みでカミラの犯される姿を撮影するアンナ隊長
その異常なほどに興奮した姿にどこか納得できないシャロンだった

「でも…これは大変なことです、偽物とはいえ本人にそっくり
…このままじゃカミラ王女の名誉が…。」

「……ふう、良い記録が残せたわ…た
しかにすぐ対策を考える必要があるわね…。」

「はい、すぐに戻りましょう…！」

「待って…この建物からも…男の声が聞こえてくるわ…？」

すぐ隣の建物からも男たちと女の声が聞こえてきた

嫌な予感がし、不安な表情を浮かべるシャロンと
わくわくした様子で笑みを浮かべるアンナ隊長…

そして…二人はゆっくりと窓から中を覗き込むと…そこには…

「あっああああっ!!!?」

男に尻を向け激しく肉棒を突かれる一人の少女の姿があった



「あ、あれは…リンさんっ!?!」

それはキアランの公女リンディス…
誇り高く特務機関内でも皆から信頼を得ている英雄の一人であった

そんなリンが今ベッドの上で男と激しいセックスを繰り広げていた

「あああ、気持ちいいっ…！
もっともっと気持ちよくしてくださいっ！！」

男に肉棒を強請るその姿は
シャロン達が知っているリンとはまるで別人であった
このリンが自分たちの知っているリンとは
別人であることは理解できていたが
それでも全く同じ姿をした偽物の淫乱な姿は
シャロンにとってかなりショッキングなものであった

「どうだ、中に出して欲しいのかっ！？」

「はいっ、中に欲しいです！私の中に出してくださいっ！！」

「よし孕ませてやるぞ！俺の子を産むんだっ！！」

「はいっ、ああああああっ！！！！！！」



「あああ！中に…っ！？」

その様子を見ているシャロンの方が肝が冷える思いがした
しかし偽リンは男と笑みでキスを交わし
さらにその肉棒を求め肉棒へとしゃぶりついていた

「ああ、なんだか頭が…アンナ隊長…？」

「はあ…はあ…素晴らしいわ…
これで特務機関の予算の心配はなくなる…それどころか…。」

「隊長っ！！ な…何を考えているんですかっ！？」

「え、あっ！ と、とにかく…もう少し村を調べてみましょう！
偽物について何かわかるかもしれないわ。」

「そ…そうですね、何だかすごく疲れましたが…。」

英雄たちの偽物が存在することを証明するために、
さらに村の中を搜索する二人

「あっ…あああっ…。」

「…シャロン…変な声出さないでくれる？」

「えっ、私じゃないですよ？」

「…え、たしかにシャロンの喘ぎ声が…聞こえたんだけど。」

「喘ぎ声なんて出すわけ…。」

「あああああっ！！！！すごい、太いですっ！！」

シャロンの耳にも喘ぐ声が聞こえてきた
それが自分の声なのかわからず戸惑ってしまったが…
声の聞こえた部屋の中を覗き込むと…
そこには…
「ふふ、おじさんのが奥まで入ってきてますよ…？」



男の上に跨り腰を振っている自分の姿がそこにあった

「……………」

「す、すごいわシャロン…意外と良い体してるのね！」

「だ、ダメっ！記録に残さないでください〜！！」

必死に魔導書を抱えたアンナ隊長を押さえつけるシャロンだったが

オオ目の前で甲とヤックスオる自分の姿に混入！

「ああ、おじさんっ…ダメ、イキそうです！！
気持ちよすぎて…もうダメっ！！！」

シャロンの目の前で大量の潮を吹きあげる偽シャロン…
その姿を見たシャロンは白目を向きその場に倒れ込んでしまった…

「シャロン！大丈夫…！？ …たしかにこれはショックよね…。」

ぐったりとしたまま目を覚ましそうにない
シャロンを抱えすぐに本部へと戻ろうとするアンナだったが…
窓の中で激しくセックスする偽シャロンの姿に思わず見とれてしまう」



激しい腰使いで男を再び男の肉棒を弄びだす偽シャロン…

「…こっちのシャロンにもこんな一面があるのかしら…。」

シャロンを抱え特務機関本部へと戻るアンナ…
しかし…英雄たちを陥れる邪悪な意思が動いていることに

1章 蒼炎の英雄たち

気を失ったシャロンを抱え特務機関本部へと帰還したアンナ…

彼女の報告を聞いた英雄たちだが
アンナの語った「もうひとりの英雄たちの存在」に
戸惑いを隠せない英雄たち

「もう一人の私がいるなんて…許せないわね…。」

「ちょっと、カミラ姉さん落ち着いて！」

斧を構え偽物退治へと向かおうとするカミラを
必死に抑えるカムイとエリーゼ

「今は大人しくしていたほうがいいわ、
他に誰の偽物がいるか判らないもの。」

「え、カミラお姉ちゃん以外にも誰かいたの??」

「ええ、…その…リンさんと…私もいました。」

「えっ、私もですか!？」

自分の偽物もいたと聞かされたリンは戸惑いの表情を浮かべる

「カミラ王女にリンディス…さらにシャロンの偽物まで…
何か嫌な予感がするな。」

「ところで…偽物の私って…どんな感じでした?
偽物だと一目でわかりました？」

リンからの質問に言葉を失ってしまうアンナ隊長とシャロン
偽物がいるカミラ王女と姉妹達も
その返答を待ち食い入るようにアンナとシャロンを見つめていた

「…ええ、一目でわかったわ…間違いなく偽物だと。」

「よかった、それならアスク王国の皆さんも
すぐに偽物だと気づいてくれますね！」

「う～ん…そうだといいんですけど…」

外見は瓜二つだが性格がまるで違い…
淫乱な偽物だとは言い出せない二人
そんなことを言えば逆上したカミラ王女と姉妹は
すぐに偽物討伐へと出撃してしまうだろう
そしてリンは…ショックで倒れてしまうかもしれない
偽物をその目で見たシャロンのように
ひどく落ち込んでしまうことだろう

エンブラ帝国軍の動きが無いとはいえ
英雄たちが勝手に行動すればさらに状況は悪化するかもしれない
さらに偽物の出現にヴェロニカ皇女が
関わっている可能性も否定できないとアンナ隊長たちは考えていた

英雄を支配する力を持ったヴェロニカ皇女が
英雄の偽物を使い本物をおびき寄せるつもりなのかもしれない
そして誘き寄せた英雄を我が物にし支配しようとしている…
そんな最悪な考えすら彼らの頭に浮かんでいた…

とはいえ、この状況で何もしない訳にはいかない…

「それで…なぜわらわ達はその村に行かねばならぬ？
このベグニオン帝国皇帝サナキが？」

アンナ隊長に呼び出されたのは
最近異界から召喚されたばかりの英雄たち
ベグニオン皇帝「サナキ」とクリミア王女「エリンシア」
さらにグレイル傭兵団から「ネフェニー」と「ワユ」の4人であった

「そもそも…エリンシア王女はともかく
なぜこの者達と同じ扱いなのか…。」

皇帝サナキは傭兵であるワユや村人のネフェニーと
同じ待遇であることに少し不満である様子だった
皇帝として優れた素質を持ち民の事を想う
若くも優れた才能を見せるサナキであったが
不自由なく宮殿で暮らしてきたこともあり、
他の英雄たちよりも大分ワガママな性格をしていた

「なぜセフェランやゼルギウスを召喚せぬ！？
召喚士をここに呼んでくるのだ！」

「まあまあ…サナキ様落ち着いてください、
きっといろいろと事情があるのでしょう…。」

皇帝サナキを懸命になだめるエリンシア、
デイン王国の侵略により国を失い
グレイル傭兵団の助けにより生き延びることができた…
ベグニオン帝国を元宗主国とする王家ということもあるが、
母のいない同じ境遇からか
今ではサナキにつきっきりでその世話をしていた

「失礼した…まだ異界に召喚されたことに慣れていないのじゃ…。」

「サナキ様…ようやく落ち着いたみたい、
よほどセフェランって人に会いたいんだねえ。」

「ワ…ワユさん！ そんなこと言ったら失礼じゃよ…だよ…。」

「お…お前たち…わらわはセフェランがおらぬとも…何も問題は…！！」

「ワユさん…サナキ様をまたからかって…。」

「という訳で君たちに調査をお願いしたいと考えているんですが…。」

アンナとアルフォンスは
これが帝国の仕掛けた罠であるという考えの元で
最近召喚されたばかりの英雄たちであれば
帝国も偽物を用意する準備がないだろうと考えたのだ

現にカミラ王女やリンにシャロンは
戦場でも優れた活躍を見せ帝国側にも名の知れた英雄となっていた

「そういうことであれば…サナキ様を危険にさらすことはできませんが
偵察のお役には立てるかと思います。」

「…なぜわらわが行く必要があるのじゃ？」

「だってサナキ様すごい魔力をお持ちじゃないですか！
うちのセネリオなんて目じゃないくらい！ね、ネフェニー？」

「え、あ…うん、サナキ様はとても御強いと思います…。」

「ふむ…たしかに小さいころから
セフェランに鍛えられてきておるからのう…。」

「またセフェラン言ってる…。」

「仕方あるまい、召喚されたからには少しは役に立つとしよう…。」

「は…はい、お願いします…！」

アンナ隊長と共に帝国国境地域の村の偵察へと向かった一行

エリンシアのペガサスに共に乗るサナキと
徒歩で進むアンナ ネフェニー ワユ

目の前に広がる森林地帯は元の彼女たちがいた世界と
あまり変わらないように見える
エリンシアと共にペガサスで飛んでいると…
サナキは親衛隊長のシグルーンと共にDに過ごした時を思い出してしまう
皇帝という地位ながらも
まだ若いサナキは異界の地で寂しさを感じているようであった

そんなサナキの事情をある程度理解しているエリンシアや
皇帝としての地位をあまり気にせず
友人のように接するワユやネフェニーが
共に召喚されたことは幸運であると言える
寂しさを感じながらも心細さは
微塵も感じることなく過ごすことができ
異界の風景を楽しむ余裕もあるようであった

「む、エリンシアよ…あそこに村があるぞ？」

「ええ、あそこが目的地です！」

「サナキ様…すっかり楽しんどる…。」

「異界だし…いいんじゃない？ 少しは羽伸ばしても。」

「うん…そうじゃの。」

「みんなちょっと油断しすぎよ、今は国の一大事なんだからね！」

偵察予定の町に近づき気を引き締める一行…
エリンシアが上空から偵察した限りでは…
町は平穏を保っているようだ
偽物たちがいる様子もない

「まず私たちが近づいてみるわね。

エリンシア王女とサナキ様は離れて見ていて…何か起きたら…。」

「わかっておる、上空からわらわの魔法で援護するのじゃろう？」

「ええ、だけど危険だと判断したら

すぐに本部に戻って状況を知らせてね。」

「わかりました、お気をつけて！」

アンナ隊長とワユ ネフェニーは町の中へと足を踏み入れていった…
そして…町の人々は…

「おお、アンナ殿に英雄の皆さんようこそ！」

町の代表らしき男が笑顔で3人を迎え入れた

「え、ええ…どうも…。」

町の人々からの歓待を受ける3人…

建物の中へと案内され豪勢な食事を振る舞われる…

「アンナさん…なんでこんな歓迎されとるじゃろ…？」

「う〜ん、この町に来たの初めてなのよねえ…

あたしの事なんで知ったるのかしら？」

「侵略者と戦ってるんだもの、

有名人な訳だし歓迎されてもおかしくないんじゃない？」

特務機関の名と共に戦う英雄たちの活躍は王国全土に広まっている…
歓待を受けても不思議では無いのだが…
なにか違和感を感じるアンナ隊長だった

「この度は本当にありがとうございました！」

「英雄様たちのおかげで山賊たちも大人しくなりまして、
本当に助かりました！」

山賊という言葉に戸惑いの表情を見せるアンナ
山賊退治をしたという話しは全く聞いておらず、
英雄たちを送り込んだ記憶もまったく無かった

「山賊って私たちが退治を…？」

「とんでもない、話し合って大人しくさせてくださったようで…。」

「話し合って山賊が大人しくなるものなの…？」

「何か話が見えてこない…ですね。」

「町長っ！ また山賊達がやってきました！」

「はっはっはっ、心配いらんよ
英雄の皆さんがここにおられるじゃないか！」

「……………」 「……………」 「……………」

アンナ達が町の入り口へと向かうと…
そこには数人の山賊たちがアンナ達を待つように立っていた

「おう、アンナじゃねえか！ また楽しませてもらいに来たぜ！」

「ちよっとっ！ 気安く呼ばないでくれる！？ あんた誰よ！」

「これが…その山賊…？」

「全然…大人しくなってないじゃん…。」

「そう言うなよ！散々やり合った仲じゃねえか！」

「きゃあああああっ！！！」

山賊の男はアンナへと近づくと
いきなり乳房を両手で鷲掴みにしてきたのだった
突然の山賊の行動に体が硬直してしまうアンナ

「な、なにしてんだよっ！！」

ワユが剣を抜き山賊に切りかかる

「おっと、新しい英雄さんも可愛いじゃねえか…歓迎するぜっ？」

「歓迎って…嫌な予感しかしないんだけど…」

武器を構え山賊を迎え撃とうとするアンナ達…だが…

「まあまあ、遊びはその辺で…

さあ、武器を下ろしていつも通りにいきましょう。」

町長と数人の市民がアンナ達と山賊との間に入り…
英雄たちに武器を下ろすように促す

「な…なんで…あいつら山賊なんだよ…！！？」

「この町の人…おかしい…。」

市民たちの行動が理解できない3人…
人々は武器をアンナ達から奪い取っていった
武器を持たぬ市民たちを傷つけることもできず、
戸惑いながらも武器を渡してしまう

「なんで…私たちをどうするつもり…！！？」

「何言ってる？町を襲わない代わりに
特務機関の女たちが体を捧げるっていう約束だろうが。」

山賊の言葉に驚きを隠せないアンナ達…

当然、アンナはそんな約束した覚えはなかった…

「まさか、もうひとりの私が勝手にそんな約束を…！？」

偽物の英雄たちが本物の英雄たちの評判を
落とそうとしていることは理解できていたが
山賊を手駒にし市民たちの信頼まで得ているとは想像もできなかった

「さあ、今日もたっぷり楽しもうぜ…アンナ！」

「いやああ、あなたたち…逃げてっ！」

山賊に押し倒されたアンナの叫びを聞き
駆け出すネフェニーとワユ…だが

行く手を遮る山賊…そして市民たち…
市民たちの目は山賊と同様…ワユとネフェニーの体を見つめており
どうやらこの市民たちは山賊に取り入り
おこぼれを狙っている男たちのようだった

「もう遠慮しないわよ…こうなったら力づくでっ！」

「いやああ、ワユさんっ！！？」

「ネフェニー！？」

「ああああ、いやあっ離してえっ！！！」

市民の前で山賊に抑え込まれたネフェニー…
槍が一本あれば簡単に倒せる相手であったが
町の異常な雰囲気動揺していたネフェニーは本来の力を出し切れず
容易にねじ伏せられてしまった

「ほお、兜で良く見えなかったがすごい美人じゃねえか、
さすが英雄様だな！」

「ひっひいっ…！？」

整った顔立ちと引き締まったスレンダーな体…
しかしスレンダーでありながらも豊満な乳房を持つその体…
鎧の上からでもその抜群のスタイルがはっきりとわかる…

「いやあ、触らねえでくれえっ！」

鎧を脱がされ服の上から体を撫でまわされるネフェニー

「おお、すごいでかいじゃねえか…英雄様は良い物喰ってるんだなあ？」

「うっ…いやあっ！」

服を捲られ丸出しになった尻を鷲掴みにされ揉まれる
体を震わせ全身から汗が噴き出す

はじめて体を触ったのが山賊など耐えられない屈辱…
しかし、尻を撫でまわされたネフェニーの体は敏感な反応を見せ
口からは悲鳴と喘ぎ声が溢れていた

「や、やめてっネフェニーから離れろっ！！」

ネフェニーを助けようと駆け寄ったワユも男たちに捕らわれていた

「さて…下着の下はどうなっているかな？
じっくり見てみるとしようか…！」

「や…やめてえっ！！」

大勢の男の前に下着を下ろされるネフェニー
露わになった秘部を男たちが食い入るように見つめる…
ネフェニーは顔を真っ赤に染め涙を流し…必死に耐えていた

「ほお、こんなに綺麗なのは初めて見たぜ…間違いなく処女だろ？」

「うっ…くっ…私はっ…。」

「ひあああっ!!!!???'」

山賊の男はネフェニーの尻に顔を埋め秘部を舌で激しく舐めまわしてきた
舌でかき回され悲鳴を上げて悶えるネフェニー
激しい快樂が彼女を襲っていた…

「あはあっ…ああっ…ああっ…!!?'」

「すげえ…愛液がどんどん溢れてくるぜ…。」

愛液でぐしょぐしょとなったネフェニーの秘部に…
ぐっと肉棒を押し付ける山賊…

「欲しくて堪らないだろ？ 俺がお前の処女を頂いてやる…！」

「ま…待ってえ…ダメだあっ…そ、それだけはっ!!!!?'」

涙を流し必死に山賊に許しを請うネフェニーだったが
彼女の言葉を最後まで聞くこともなく
肉棒はネフェニーの膣内へと押し込まれていった

「あああああっ!!!!???'」



肉棒が挿入され激しい激痛に顔を歪めるネフェニー
処女を奪われた苦痛も重なり涙が止まらない

山賊の男は自分の性欲を満たすことだけを考え
激しく腰を振りネフェニーを犯し続けていた

「ネフェニー…やめてっ…そんなことっ！！！」

男たちに拘束されたワユは必死にネフェニーを助けようとしていた
足を振り上げ周囲の男たちを蹴飛ばし
下着が丸見えになろうとも遠慮はしなかった…

「おい、ずいぶんと乱暴な英雄さんだな…俺が大人しくさせてやろう！」

「嘘でしょ…やめてっ…あたしだってまだ…！？」

「お前も処女なのか？ 英雄ってのはそういうもんなのか…？」

山賊たちはワユの服を強引に引き裂き乳房を露出させる

「ひいっ！？」

怯えるワユの乳房に顔を埋め吸い付く山賊…激しい舌使いで弄ばれ
全身から力が抜けていくワユ

「あああっ…や、やめろおっ…！！？」

全身に電気が走るような感覚がし
自分で立っていることができなくなるワユ
山賊に体を抱えられたままその上に跨ってしまう

「どうだ…お前の体は欲しくて堪らないみたいだぞ…？」

肉棒を秘部に擦り付けられるとワユの秘部からは大量の愛液が溢れ出す

愛液で濡れた秘部に肉棒がすんなりと挿入していった

体を震わせ喘ぐワユ…肉棒が挿入すればするほど激しい刺激が押し寄せ力が入らなくなっていく

「いっ…イタいっ…イタいよおっ…!!!」

苦痛に悲鳴を上げるワユだが肉棒はあっという間に根元までワユの膣内へと収まっていった…

「あああああっ!!!!!!」

山賊の上で体を揺さぶられ激しく肉棒で突きあげられるワユ歯を食いしばり必死に苦しみに耐えていたが…

「あああああっ!!!」

必死に耐えても口からは喘ぎ声が漏れてしまう…

「おいおい、自分たちだけで先に楽しみやがってっ!」

犯されるワユの前に現れたのは…山賊の仲間たちであった

「悪いなっ先に楽しんでるぞ、ほらこっちは空いてるぞっ!」

「ひいっ!??」

山賊の指が尻穴へと入り込むとワユは体を反らせる

「おお、俺はこっちが好みでな…英雄さん楽しませてもらうかっ!」

「い、いやっ…無理よっ、お尻は無理っ!!!!!!?」

必死に体を揺らし逃れようとするワユだったが激しく肉棒で子宮を突かれると抵抗できないほどの快楽が押し寄せる

「あああああっ!!!?」

抵抗できないワユに2本の肉棒が挿入されていった



アナルを押し広げ強引に挿入されていく肉棒
悲鳴を上げ続けるワユだったが…

体はどんどん熱くなり意識が朦朧としてくるのだった
まるで夢の中にいるような不思議な感覚に包まれたワユ…

苦痛に感じていたセックスだがジワジワと
快樂だけを感じられるようになっていく

「あああっ、なんで…何でお尻が…気持ちいいのっ!?!」

初めてのセックスの想像を超えた気持ち良さに驚く
レイプされているはずなのに…さっきまでは苦しかったのに…
自分に訪れた感覚の変化に驚くと同時に
セックスの気持ちよさに気付かされたワユだった…

「ああああ、山賊に犯されてるのに…っ…気持ちいなんてっ…!!!」

悪い夢を見ているのだとそう自分に言い聞かせるワユ…だが

山賊の慣れた腰使いで激しく突かれ続けると…
気持ちが高ぶり体が反応してしまう…

「あはああああ、ダメええっイクううっっ!!!!??」

山賊たちの前で潮を噴き上げるワユ…
潮を吹いたのは初めての経験であった

あまりの快楽に山賊の上でぐったりと倒れ込むワユ…
しかし、山賊たちはワユに遠慮することなく激しく腰を振り続ける…

「あああっ、待ってっ!!まだイッたばかりなのにっ
…激しくしないでええっ!!!」

「ずいぶんと感じやすい体なんだなっ…
中に出してやったらどうなるだろうな!？」

「いっ、いやよっ…中に出されたら…妊娠しちゃうっ…!!!」

口では嫌がるワユだったが最初に見せていた抵抗する様子は無かった
しっかりと尻を突き出しセックスを受け入れているようにも見える

「へへへ、しっかりと孕ませてやるぞっ…おら中に出すぞっ!!」

「ああああ、ダメっ…中にはっああ…!!!??」

限界を迎えた山賊の精液がワユの膣内で射精され
その瞬間にワユ自身も絶頂を迎え再び大量の潮をまき散らした
ワユの表情は今まで見せたことのない不思議なものであった



同時にアナルにも大量の精液が溢れていく
強烈な射精を受けたワユは意識を失い
山賊の上に倒れこみ体を震わせていた

「あうえっ…もう…しゃぶれません…許してっ！」

背後から肉棒で突かれながら強引に
男たちの肉棒をしゃぶらされるネフィー

初めて味わう男の精液…

苦く耐えがたいほどの味わいであり何度も吐き出してしまったが
今では何とか耐えながらも飲み込むことが出来るようになっていた
幾度もの精液を被った

ネフェニーの整った美形の顔は精液に塗れ涙と唾液と混ざり合っていた

「本当に良い女だな…ネフェニーは…気に入った…
俺の女にしてやろうか？」

「い、いやだっ…山賊となんて…っ…！？ あはあぁっ！！！」

ネフェニーもワユと同じように不思議な感覚の中にいた…
男たちの肉棒をしゃぶり出したころから
体が熱くなり頭がボーっとしてきた

同時に山賊の肉棒が膣内を刺激する感覚に魅了され始めていた

「あっ…あぁあぁっ…き…気持ちいいっ……！！」

膣内を擦り付ける感覚…

その肉棒の形まではっきりと感ずることができた

「あははあぁあぁ！！！」

幾度も潮を噴き上げ山賊とのセックスに喜びを見せる体…
その体の変化に気づく余裕はネフェニーには無かった

「そろそろこっちも限界だっ…どうだ中に出して欲しいだろ？」

「な…中は…ダメっ……！？」

小さな声で抵抗するネフェニーだがそれ以上の抵抗は見せない

「あっ…あぁあぁあぁっ…イキそうじゃっ…またイツちゃうよっ！！！」

限界が近くなった山賊はさらに激しい腰使いでネフェニーを攻めた
ネフェニーはその激しいセックスを涙を流しながら受け入れていた…
想像を超えた快楽が押し寄せ潮を噴き上げるネフェニー



「うぐうっ…な…中に出てるっ…あああつ…
こんなに気持ちいいなんてっ…。」

じっくりと快樂の余韻に浸るネフェニー…

「どうだ…まだお前とヤりたい男がたくさんいるぞ…?」

「……………はい…………。」

ネフェニーは男たちに向けて尻を突き出し…男の肉棒を受け入れる…

「驚いたな、あんなに抵抗していたのに…この媚薬本当に効くぜ…。」

「ああ、あのフードの男の言う通りだな…。」

「…な…何が起きているのだエリンシア王女…？」

「ダメですっ！ サ…サナキ様は見ちゃいけませんっ！！」

「お…怒らなくてもよいだらう…??」

「ご…ごめんなさい！ でも…これは一大事です…
すぐに…皆に知らせないと…！」

上空から3人の異変に気付いた二人はすぐに援護し救出に
向かおうとしたが…

3人の周囲には山賊と村人が集まり
魔法で山賊だけを倒すことは不可能であった
二人はこれ以上近づくこともできず
すぐに救援を呼びに特務機関本部へと引き返した

山賊達が二人の様子を伺っていることも知らずに…

「どうやら他にも英雄がいるようだな…、あのペガサスの後を追え！！」

「へい、ペガサスに乗ってる女は上玉が多いですからねえ…！」

「そうだ…絶対に逃がすなよっ！！」

2章 ヴェロニカ皇女

「ヴェロニカ様…可哀想…。」

「どうしたのアイネ…今更あの子に同情してるの？」

寂しそうに玉座に座るヴェロニカを眺めていたのは…
アカネイア大陸にある暗殺組織の一員であった…
カタリナとクライネであった…
本来はマルスを狙う為に送り込まれた暗殺者の二人であった

幼いころから同じ孤児院で育ち姉妹のように支え合ってきた…
孤独なヴェロニカの姿に昔の自分たちの姿を重ねてしまう二人…
その力で支配され別の世界へと連れてこられたとはいえ…
本来は心優しい二人の少女は
ヴェロニカを放っておくことなどできない

「見捨てることなてできません…クライネ…。」

「わかったわよ…本当にアイネは甘いんだから…。」

暗殺者としては甘い性格をしたカタリナをクライネは邪見に思っていた
しかし、彼女を姉として慕う気持ちは変わっておらず
暗殺組織から離れた異界の地では、
二人はかつての明るさを取り戻し笑顔を見せていた

「ヴェロニカ皇女！ 大変ですっ！」

「大変ですよ～っ！」

ヴェロニカとカタリナ　クライネの元へと慌てて駆け寄ってきたのは…

異界の英雄「ターナ」と「アメリア」であった
フレリア王国の王女である…ターナ　と
グアド軍に所属する新人兵士…アメリア

元々は敵国同士の二人であった二人…

おてんばなターナと明るくしっかりした性格のアメリアは
同じ世界からやってきたことを知りすぐに意気投合し、
今では敵国出身であることなど忘れ友人同士となっていた

「ちょっとうるさいわよ二人とも！

そんな大声出さないでも聞こえてるわ！」

「でもすごい慌ててますね…ターナ様王女なのに…。」

ミニスカートが捲れ下着が丸見えになったまま走るターナの姿に
言葉を失う二人…

鎧を纏ったアメリアはかなり辛そうに走っていたが
彼女もミニスカートを着用していたため
同じように下着が丸見えになっていた

「ふたりとも丸見えじゃない…油断しすぎよ…。」

「…なにが大変なの…ターナ アメリア…？」

少し不機嫌な様子で二人に尋ねるヴェロニカ

「ええと…また英雄さんたちが…消えてしまいましたっ！」

「！！？」

アメリアの言葉に驚きを隠せないヴェロニカ

「消えたのは…ラインハルト、オルエン兄妹…

そして剣士アイラなど多くの英雄が消えてしまいました…。」

ターナの言葉にさらに驚愕し玉座へと座り込んでしまうヴェロニカ…

英雄たちはまた異界の地から連れてくることができる…だが
手に入れた英雄を奪われることは
ヴェロニカにとって屈辱以外の何物でもない

「…どうして消えたの？あたしの英雄は…誰が盗んだの？」

「それが…目撃した者たちは皆…

フードを被った男が連れ去ったと言っております。」

「それと…！ 不思議な形をした輝く武器を手を持っていたとか…！」

「フードはともかく…輝く武器…？もう少し情報はないの、アメリア？」

ターナとアメリアの報告に割って入るクライネ

「あはっ…そういわれてもなあ…目撃者は多いんだけど…。」

「それ以上の情報は今のところありません…。」

「もうターナ王女もしっかりしてよ…あたしなら絶対に仕留められたわ。」

「クライネ…そんな言い方しなくても…。」

そんな様子をじっと見つめるヴェロニカ…

ヴェロニカには報告されたフードと輝く武器の二つに心当たりがあった

「アスク王国の召喚士が…そんな服と武器を持っていたわ。」

ヴェロニカの言葉に言い争いを止め考え込む4人の美女

「…召喚士が…でもアスク王国の召喚士って…。」

「女性だったわよね？すごく可愛って噂だけど…？」

「う～ん、目撃者は絶対に男だって断言してたけど…。」

「召喚士殿の偽物でしょうか？恰好はともかく…

神器の偽物は簡単に用意できないはず…。」

様々な情報を纏めきれず状況は混乱するばかりであった…

「とにかく…アスク王国特務機関が絡んでいると考え行動すべきですね。」

「ああ、そして必ず他の英雄たちを狙いにくるはず…。」

「各地に分散している英雄たちの状況確認と召集を急ぎましょう。」

「私たちも今は勝手に行動しないほうがいいね…。」

「よろしいでしょうか…？ヴェロニカ皇女。」

「ええ、任せる…。」

英雄たちに対応を任せ宮殿の奥へと向かうヴェロニカ

私室のベッドに横たわり…この数日の疲れを癒そうとしていた…
その時…

「ふむ…素晴らしい…君の成長が楽しみだな…。」

「…誰っ!？」

ヴェロニカの私室にはフードを被った謎の男の姿があった

「あなた…報告にあった…召喚士…
でもあたしが知っている召喚士じゃない。」

その言葉に不敵な笑みを浮かべる男…

「前にいた異界ではお前を抱けなかったからな…
今回はしくじらないよう慎重に事を進めたよ。」

「前にいた異界…あなた…べつの異界から…？」

「さあ、待ちに待った時が来た…これからすべてが始まる…。」

召喚士は纏っていたローブを大きく捲り上げた…
その下には何も身に着けておらず
大きく勃起した肉棒がヴェロニカの目に入って来た

「……………！？」

一瞬何が起きたか理解できずただ呆然としてしまったヴェロニカ
だが…身の危険を感じたヴェロニカは
咄嗟に自らの力で男を支配しようと試みるのだった

「俺は異界から来たが…残念ながら英雄ではない、
お前の支配の力は通じないぞ。」

「そ…そんなっ…？」

愕然とするヴェロニカに迫り、ベッドの上へと押し倒す男

「きゃああっ！！？」

ヴェロニカは精一杯叫んだ…
しかし…宮殿の奥深くにある私室…
さらに普段から使用人さえも遠ざけているため
その悲鳴を聞いている者はいなかった

「さ…触らないでっ…！？」

男はヴェロニカの服を引き裂き、その小さな体を撫でまわし舌を這わせ
全身を舐め始めたのだった

「ひあああああっ！！！！！！？」

体を震わせ怯えるヴェロニカ…小動物のように怯えるその姿に男はより興奮しさらにその体を弄ぶ

「あ、そこはっ！！？」

ヴェロニカの下着の中へと手を伸ばし秘部を指で刺激する
普段は冷静で感情を表に出さないヴェロニカだが
膣内を指で刺激すると面白い程に敏感な反応を見せた

「ひいっ…あうっぐっ…！！??」

「ずいぶんと敏感な体じゃないか…もっと楽しませてくれ…。」

秘部を攻められぐったりとしたヴェロニカを抱えた男は…
下着をずらし肉棒を強引にヴェロニカの秘部へと押し当てる

「あああああっっ！！！！??」

じわじわと肉棒がヴェロニカの膣壁を押し広げ挿入を開始した
あまりの苦しみにヴェロニカは男にしがみ付き必死に苦痛に耐える

「痛いっ…痛いよっ…！！ いやあああああああああっ！！！！??」



「うっ…あああっっ…！？」

涙を流し苦悶の表情を浮かべるヴェロニカ
男はこの瞬間を待ち望んでいたとばかりに、
激しく興奮しヴェロニカの体を大きく揺さぶった

極太の肉棒が膣内の最深部まで到達すると
ヴェロニカは今まで出したことのない声で喘ぎ男に許しを請った

「や…やめてっ…お願いっ、もういやあっ…！！」

しかし、
男はヴェロニカを決して離そうとはせず激しく腰を振り続けていた
異常なほどにヴェロニカに執念を燃やしているかのような
その表情に恐怖するヴェロニカ

強引に唇を交わされ…舌で口内を舐め回されようとも
恐怖したヴェロニカは抵抗することができなかった

「うっ…うああっ…ダメっ、体が熱いっ…！！??」

次第に熱くなり頭の中が真っ白になっていくヴェロニカ…そして

「きゃあああああっ！！！」

ヴェロニカは大量の潮を噴き上げた
初めての潮吹きに目を丸くして驚いた様子のヴェロニカ
自分でも何が起きたのか全く理解できていなかった

しかし…唯一感じられたのは…

「あっ…ああっ…気持ちいい…………っ！？」

「そうだろ？すごく気持ち良いんだろ？」

「あっ…ううっ…っ……。」

「もっと激しくしてやる…！」

「あっ…あああああっ！！？」

男の激しい腰使いに悲鳴を上げ続けるヴェロニカ
しかしそれは苦痛の悲鳴ではなく
快楽に耐え切れず漏れてしまう声であった

「ああああっ出ちゃうっまたでちゃううっ…!!!」
何度も男の上で潮を噴き上げるヴェロニカ
潮を噴き上げる度にヴェロニカの瞳からは理性が失われていくようだった

「ふふふ、これで中に出したら一体どうなるかな…くっ試してみようっ!!」
「あっ…ああああっ!!!?」

膣内で射精が始まると…体を大きく反らせ痙攣させるヴェロニカ
唾液を垂れ流し喘ぐその表情を満足そうに見つめる男…



「アイネ、ヴェロニカの様子は？」

「まだ私室で休んでおられるんじゃないかしら？
しばらくは休ませてあげましょう。」

「まったく非常事態だっていうのに…あの仮面の男はどこいったの？」

「そういえば…全く姿がみえませんか…いつも皇女の傍に…。」

「あの男…危険な匂いがするのよね……。」

広間でカタリナとクライネが皇女を待っていると…
奥から姿を現したヴェロニカ皇女…

しかし、その姿を見て二人は驚愕する…

「ヴェロニカっ…どうしたのっ…！？」

「そんな…あなたはっ…！？」

全裸で秘部から精液を垂れ流しながら現れたヴェロニカ…
その背後にはフードを被った男の姿があった

それが英雄を連れ去っている
謎のフードの男であることはすぐに理解できた

「ヴェロニカに何をしたっ！？」

怒りの形相で弓を構え矢を向けるクライネ

すると…男はヴェロニカを引き寄せ抱きしめる…
状況を理解できず困惑するクライネの手は震えていた

「…お前たちをヴェロニカの支配の力から解放してやろう。」

「えっ！？」

「解放…私たちを…でもヴェロニカ皇女は…！？」

支配から解放されれば元の世界へと戻ることもでき
異界での望まぬ争いに巻き込まれることもなくなる
しかし…

カタリナとクライネは目の前で少女を人質に捕る男のやり方を
許すことができなかった

「冗談じゃないわ…あんたみたいな男にその子は渡さない！」

「すぐにヴェロニカ皇女を離しなさいっ！！」

男に対し敵意を剥き出しにし武器を構えるカタリナとクライネ…
その様子にため息をつきガッカリした様子 of 男…

「残念だが仕方がない…お前たちも俺のコレクションに加えようか。」

「コレクションッ…！？ 何様のつもり！！」

激高するクライネだったが…
召喚士が輝く神器を手に取り天に向けると…

カタリナとクライネの周囲に宮殿のあちこちから
何体もの異形の怪物たちが姿を現したのだった

「きゃああっ！？」

「な、なんなのコイツらっ！？」

「他の奴が召喚した英雄を俺は手駒にできない…
だからこいつらにお前たちを墮落させるとしよう。」

カタリナとクライネに襲い掛かる異形の怪物…

「いやああああっ！？」

巨体の怪物に拘束されるカタリナ

「アイネッ！！！！？」

アイネを助けようとするクライネだったが

「な…何が起きてるの…カタリナ、クライネっ!？」

「何なのこの怪物たち…!？」

騒ぎを聞きつけたターナとアメリアがすぐに二人を助けようとしたが…

ヴェロニカ皇女の様子は普通ではなく…

フードの男の合図で襲ってくる怪物たち…

ターナとアメリアは決死に戦っていたが状況は明らかに不利であった

「アメリアさん、ひとまずこの場から離れましょうっ!」

「でもっ、皇女とカタリナ達はっ!？」

「他の英雄たちと合流してすぐに助けに戻りましょうっ!」

「わ…わかった…!」

走り出し愛馬であるペガサスの元へと向かうターナとアメリア…しかしペガサスの前にいたのは…

「あら?どこへ行くつもりですか？」

「これから楽しいことが始まるんですよ？」

二人の前に…もうひとりの自分たちが立ち塞がった…

まったく同じ顔をしたもうひとりの自分の姿に啞然とする

ターナとアメリア

しかも…もうひとりの自分たちは

乳房を丸出しにしほぼ全裸のような恰好をしていた

「わ…わたしがもうひとり…こんなことって…!？」

「わ…わたし…なんでそんな恰好してるのっ!!!」

「あなたたちの為に最高に楽しい事を用意しておいたわよ…!」

「きっと気に入るよ…だってあたし達が夢中になってるんだからねっ!」

目の前にいるのが偽物であることはわかっていた…
だがそっくりな姿をした自分と友人を傷つけることなどできなかった
ターナとアメリアは屍兵に捕らわれ偽物たちに連れていかれた…

～宮殿大広間～

「あああああっ、嫌っ離してくださいっ！！」

「アイネッ、大丈夫だから…あたしが必ず助ける！！」

異形の怪物に拘束されたカタリナは必死に抵抗していた…
下着が丸出しになり必死に隠そうとしていた…だが
すさまじい怪力で拘束されどれだけ抵抗しようとも
怪物はビクともしない…

「えっ…そんな、これはっ！？」


両足を抱えられたカタリナの目に映ったのは
異形の怪物の股間から伸びた異形の物体であった
赤く膨れた極太の物体が肉棒であると気付いてしまったカタリナは
涙を流し悲鳴を上げて必死に逃げようとしていた

だが…

「ああああ、無理っ…入らないよっ！！！！??」

肉棒の先端がカタリナの秘部にぐりぐりと押し当てられる
秘部を刺激されカタリナの秘部から愛液が溢れ出していく…そして

「あああっ！！？ 入って来たっ…クライネっ…
私の中に入ってきてるわっ！！??？」



いやああっ！
こんなに大きいの…
入るわけじゃないですっ！！
ああああっ！！

カタリナの膣内へと入り込んできた巨大な肉棒…
歯を食いしばり必死に耐えるカタリナだったが
腹部を圧迫するあまりの苦しさに悲鳴を上げていた

「アイネッ！！くそっ！ 離せええっ！」

屍兵に拘束されながらも必死に逃れようと暴れるクライネ…だが

「きゃあっ、どこ触ってるのよっ！！！！？」

屍兵たちはクライネの乳房を鷲掴みにし…スカートの中に手を入れて尻を挿
さらに…

屍兵たちに抱えられ身を悶えるクライネ…
こんなにも激しく体を攻められたのは初めての事であった

「ああああっダメェ……っ…イクっ!!!!??」

屍兵の激しい攻めにすぐ絶頂を迎え潮を噴き上げたクライネ…
全身から力が抜け屍兵に体を預け…ぐったりとしていた

「ああああ、やめろおっ…嫌だっ中に挿れるなあっ!!!」

クライネの両足を開き肉棒を勃起させた屍兵が迫る
反り立った肉棒を秘部へと擦り付け刺激されるとクライネは悲鳴を上げ
さらに愛液が溢れ出す

異界の地に連れてこられてから…性的な欲求を満たす暇さえなかったクライネ
僅かに刺激されただけでも体は敏感に反応してしまう

「だ…ダメ…こんな状態で挿れられたら…っ!!!? ああああっ!!!??」



「ひぎっ…あああっ…なんでっ…こんなに気持ちいのっ…!？」

挿入された途端…絶頂を迎え再び潮を噴き上げたクライネ
久しぶりに味わう快樂だからか…
それだけでこれだけの快樂を感じるのか…
自分の体に違和感を感じるクライネ…

「あ…あいつ…何かしたなっ…!？」

クライネとカタリナを見下ろすフードの男は不敵な笑みを浮かべていた…
媚薬か何かを盛られた事に気付いたクライネだったが…すでに遅かった

「うあああああっ!!!??？」

激しく肉棒で突かれると…耐えられないほどの快感が押し寄せ…
自然と声を上げてしまう…

クライネの横ではカタリナも同様に媚薬を盛られたらしく
大量の潮をまき散らして喘いでいた

「ああああ、あたまが…おかしくなるううっ…!!!??？」

快樂の中で抵抗する事もできず犯される二人…

そして…

「あああ、イキそうですう…私もう…我慢できませんっ!!!」

限界を迎えたカタリナが潮を噴き上げると同時に…
異形の怪物も限界を迎え大量の精液を
カタリナの子宮へと射精したのであった

「あああああああっ!!!??？」



屍兵に中出しされ喘ぐクライネ…
全身に射精された精液をぶっかけられようとも
クライネは嫌な様子はまったくなかった…
精液をすすり肉棒にしゃぶりつくクライネ…
その横で並び異形の怪物の肉棒を舐め回すカタリナ…
仲良く並んだその姿はまさに姉妹そのものであった…

～王都広場～

「わ…わたしに何をやる気なんですか…!？」

大勢の市民が集まる広場へと連れてこられたターナ王女…
もうひとりのターナ王女は混乱を避けるためか
どこかへと隠れ姿をくらましていた

「こ…これは黒いペガサス…？ 私のペガサスに似ているけど…。」

王女の元へ連れてこられたのは見覚えのある顔立ちをしたペガサス…
自分の愛馬にそっくりであったが黒い体色をしていた

しかも…

「な…なんでこの子…こんなに興奮しているのかしら…！？」

ターナの姿を見て激しく興奮し擦り寄ってくるペガサス…
その下半身には…

「え、…うそ…な…なぜっ！？」

ターナの視線の先には大きくなったペガサスの肉棒の姿があった
激しい興奮しているその様子からペガサスが
自分を相手に発情している事に気付く

「まさか…このペガサス…もう一人の私の愛馬…！？」

ターナ王女は気付いてしまった
このペガサスが異界から来たもうひとりの自分の愛馬であり
互いに性欲を満たし合う間柄にあるということ…
その事実に気付き…
もう一人の自分の狙いに気付いたターナの表情は怯えていた

「いやああ…離してっ…こんなことやめてっ！！！」

屍兵は泣きじゃくるターナを両足を大きく開いた状態で拘束した
肉棒がすんなりと入るように…ペガサスに向けて…

その光景を目にした市民たちは悲鳴を上げて困惑していたが…
美形の王女が拘束され秘部を晒している姿に男たちは釘付けになる…

「いやああ見ないでえええっ！！！！」

必死に叫ぶターナだったが…人々は興味深そうにターナの周囲に集まる
そこに迫るペガサスはより興奮し交尾を待ちきれないといった様子だった

「ひあああああああっ！！！！？？？」

ペガサスの肉棒がターナの膣内へと一気に挿入した…
ターナはただ悲鳴を上げ膣内に走る激しい痛みを耐えていた



「あああああ！！！！お…奥に当たってっ…！！！！？」

ペガサスは慣れた腰使いでターナと交尾を始める…
その様子には人々からはさらに悲鳴が上がったが…
多くの人々が興味深そうにその様子を眺めていた

「だ…誰かたすけっ…てっ…！！！！？」

人々に助けを求めるターナだが…人々はその光景に圧倒されており
ターナの声は彼らには届かない…

「い…痛いっ…苦しいっ…っ！！！」

苦しく顔を歪めるターナだった…しかし
屍兵が何かを指にとり…ターナの秘部にそれを塗り始めた

「な…なにっ…なにをしているのっ…！？？
あっ…体がっ…熱くなっ…っ…！？？？」

媚薬を塗られ一気に全身が熱くなるターナ…同時に
苦痛が消え去り強い快樂が一気に押し寄せてきたのだった…

「ああああっあああっ！！！！？」

その叫びと共に潮をまき散らすターナ
人々からは大きな声が上がり誰もがその光景にくぎ付けになっていた…

「ターナ様っ…ペガサスとやってキモチイイんですか？」

「あはっ…あ…ああ…はいっ…気持ちいい…ですうっ…！！！」

市民からの問いかけに笑みを浮かべて答えるターナ…

目が虚ろになり意識が朦朧としているようだったが
ターナの表情は満足気な笑みで満ちていた…
市民の歓声を浴び…ペガサスと交尾している自分…

「あはあああ…きもちいいです…ずっと…ずっとこうしていたいっ…！！！」

ペガサスとの交尾を受け入れてしまったターナ…
そして…さらなる快樂が彼女に襲い掛かる…

「あああああっ…みなさんっ…出てます…
私の中に…ペガサスの精液がっ！！！！」

ペガサスが射精を開始すると…
ターナの表情はより一層うっとりとしたものになっていく

「お腹が…膨れて…ああああ…！！！！　こんなの初めてですうっ！！！！！！」



人々の前で秘部から精液を垂れ流し放心するターナ…
その表情は今まで彼女が見せたことがない喜びに満ちたものだった

～広場横牢屋…～

「なにっ…こんな場所に閉じ込めて…私になりすますつもり!？」

「そんなことはしないわっ、
もうひとりの私の為がんばって準備したんだからっ！」

「準備って…なにを…??」

アメリアへと笑顔で語りかけるもうひとりのアメリア
彼女の合図で引き連れてこられたのは…

「ひいっ!？」

「見て、これはラグズっていう異界の種族で…
本当は人間と変わらない種族なんだけど…。」

「こ…これをどうする気なのっ…!？」

「この子はね悪い人たちに凶暴にさせられちゃって、
今は食べるか交尾することしか頭にないの…。」

それはテリウス大陸から連れてこられた…

元老院の手により暴走したラグズであった…

自我を失った凶暴さが特徴だが…

この個体はさらに交尾に執着するように育てられており

もうひとりのアメリアが性欲を満たすための大切なパートナーであった

「あなたは私だから…特別に貸してあげるわね！」

「い…いらないっそんなのいやよっ!!」

牢の中に押し込まれるとラグズは

すぐに交尾しようとアメリアへと飛びかかって来た

「きゃあああっ!!!??」

逃げようとしたアメリアに背後から覆いかぶさるラグズ

肉棒をアメリアの秘部へと押し当て挿入させようと激しく腰を振っていた

「みなさん、こちらでも素敵なショーをやっていますよっ!

集まってください!

「な…なんだ…広場だけじゃなくてこっちでも…。」

「うわ…あれアメリカさんじゃないか？
すごい…こういう趣味があったのか…。」

「ち…違う…私は強引につ…お願い助けて！！」

しかし…男たちはアメリカの丸出しになった
尻と秘部にくぎ付けになっており
アメリカの言葉に耳を貸そうとはしない

「あああ、ダメっ…中に入ってきてるうっ！！！！??」

ラグズの肉棒がゆっくりとアメリカの膣内に挿入されていった…
大勢の人々はその様子を檻の外から眺め観察していた…

「いやあああああああっ！！！！??」



「ああああ、奥まで…入ってきてるううっ！！！！??？」

ラグズは野性的な荒々しい腰使いでアメリアを攻め続けた
単調ながらも激しいその腰使いにアメリアはただ叫び続けた

だが…ターナの時と同様に…

すでにラグズの肉棒には大量の媚薬が塗り込まれており
それがアメリアの膣内で効能を発揮し始める

「あっ…あがあああああっ！！！！??？」

全身を震わせるアメリア…

秘部からは大量の愛液が溢れポタポタと滴り落ちていた
そして…潮を噴き上げると同時に
ラグズの精液がアメリカの膣内で射精された…

「あああああ、出てるっ…なにか出てるううっ…！！??？」

射精を受け全身がより熱くなる…

だがラグズの交尾はまだ終わろうとはしなかった

「ひあっ…ま…まだ続けるのっ…！！??？」

さらに激しく腰を振り交尾を続けるラグズ…

「ああああ、ダメっ…私も…私もイッちゃうっ！！！！」

大量の潮を噴き上げ絶頂するアメリア…

その表情は疲れ切った様子を見せていたが…ラグズは止まらない

「あっ…うあああっ…また中にっ…！！！！??？」

二度目の射精…溢れた精液が次第に子宮に溜まり腹部が膨らみ始める…

「ま…まだ…するの…もう…もう無理っ…っ…！！」



幾度射精しようともラグズは満足しない…

「あああっ…もう…5度目……お腹が…くるしいよっ…あっ…！！」

5度目の射精を終えようやくアメリアを解放したラグズ…肉棒が引き抜か
射精されていた大量の精液が逆流…一気に噴出した

「あああああああっ、すごいいいっつ…！！！！」

そのあまりの快感に笑みを浮かべるアメリア…

「あはっ…ああ、もっと欲しいっ…もう一度…しよっ…？」

自らラグズとの交尾を望み…肉棒を求めたアメリア…

幾度もの交尾を終え不思議な絆で結ばれたアメリアとラグズは…
決して離れようとはしなかった…

「あはあっ…あああっ！！！」

広場で二度目のペガサスとの交尾を満喫しているターナ…

「別の異界とはいえ同じ英雄…弱点も同じだったな…。」

宮殿からその様子を眺めていたフードの男と…

男の肉棒を夢中でしゃぶる皇女ヴェロニカ…

「さて…次の狙いは…。」

3章 王女達

アスク王国だけではなくエンブラ帝国にも混乱を広める謎の男…
異界のもうひとりの英雄たちを率いる男の噂は次第に広がり
特務機関の元にも届いていた

「一体何者なんですか…？」

「噂では召喚士さんと同じデザインのローブを
纏っていると聞きましたが…。」

「え、私と同じ…！？」

「カミラお姉ちゃんだけじゃなくて召喚士さんの偽物までいるのっ！？」

カムイ エリーゼ ルキナ 召喚士の4人は対応に追われていた…

特務機関に協力するこの世界の召喚士はまだ若い少女であった
噂となっている召喚士は男性…別人であることは明白であったが
各地でその噂は広がっており
英雄たちと召喚士はその対応に困り果てていた…

噂を聞いた男たちが特務機関本部に
英雄たちを抱かせて欲しいと訪ねてくることもあるほどに
英雄たちは人々に淫乱だと思い込まれ始めていた…

「淫乱だと思われるのは…屈辱ですね。」

「人々からそんな目で見られるのは耐えられません…。」

「ほんと失礼しちゃうよねっ！！」

「なんとしてもその男を捕まえて目的を突き止めないといけませんね！」

しかし、この状況において有効な手立てが無いのが現実であった
男の行方も分からず顔や背丈も不明…
今、英雄たちにできることは自分たちの潔白を訴えつつ
各地に出現している偽物の英雄たちに対処することぐらいであった

しかし、偽物が出現した英雄たちは
人々から勘違いされる可能性も高く出歩くのも危険であり
特務機関は人手不足に苦しんでおり、
まだ偽物の姿が確認されていない、
カムイ、エリーゼ、ルキナといった王族達が出陣するしかなかった

「でも…女の子だけじゃ危険だよな？」

「そうですね…剣の腕には自信があるますが、
カムイさんやエリーゼさんを守りきれるかどうか。」

「大丈夫です！私が心強い方達を呼んでおきましたっ！」

カムイが呼んでいたのは…

白夜王子リョウマと暗夜王子マークスの二人であった

「マークスお兄ちゃんとリョウマお兄ちゃん！？」

「お二人は国境を警戒していたのでは？」

「カムイからの連絡を受けすぐに戻って来た、
帝国もまだ動く気配もないようだ…心配はいらない。」

「妹たちの危機となれば、我らが黙っている訳にはいかないだろう。」

「この二人がいれば絶対に大丈夫でしょう？」

「た…たしかに…。」

「案ずるな、ルキナ王女も俺が守ってみせよう。」

「は、はいっ！ありがとうございます！」

リョウマとマークスに護衛され
ルキナ カムイ エリーゼの3人は出陣していった

特務機関本部からほど近い場所にある大きな街を目指す一行
その道中…異常なほどの殺気を放ち周囲を警戒する二人の兄…

「何者だっ！？」「曲者かっ！？」

「きゃあっ！？」「なにっ…どうしたのっ！？」

「…ウサギですね…。」

「ふん、獣だったか…。」

「敵はどこに潜んでいるかわからん、慎重に進むぞ！」

妹達を守ることに情熱を燃やす二人の兄
特務機関本部から間もない場所であっても 全力で周囲を警戒する

頼りになりすぎる兄達であったが
警戒しすぎるが故に歩みは遅く、
本来なら既に街に到着している頃だったが
まだ行程の半分も進んでいなかった

「す…すみませんルキナさん…こうなることを忘れてました…。」

「い、いえ…頼もしいお兄様たちですね…。」

～数時間後～

「ふむ、無事に街まで到達できたか。」

「幸いにも敵の姿はなかったか…この周辺は安全と考えて良さそうだ。」

妹達を無事に目的地まで送り届けることができたことに

満足する二人の兄だが…

後ろを歩くカムイ エリーゼ ルキナの3人は疲れ切った様子であった
数十mごとに立ち止まり周囲を警戒する兄達…

時には引き返し…森に隠れ…木に登り…

小さな物音にも全力で対応する兄たちだった

「…ふむ、まだ日も高い…カムイ次の街へと向かうか？」

「い、いえ！ 少し休憩を取り…物資も補給してきます！」

「カムイの言う通りだ、お前たちは休んでいる…

俺たちは周囲の偵察に向かう！」

「ふむ、良い考えだ、暗夜の王子よ！俺たちはこの先を確認してくる！」

「は、はい…どうかお気をつけて！」

「お兄ちゃん達…ほんと元気だね…。」

カムイ達を残し街道へと駆け出して行く2人を見送る3人…

「…少し体を休めましょうか…。」

「そうですね…この先の道のりはもっと厳しくなりそうですし…。」

「やっとうっくりできるよお…。」

3人はひとまず休憩を取るために街の宿へと向かっていく…

「おい、あの3人って…この前の？」

「ああ、間違いない…準備を始めるぞ…！」

部屋でのんびりとくつろぎ兄たちの帰りを待つ3人…
エリーゼに誘われ一緒に風呂へと入るカムイ…
そんな仲の良い姉妹の姿に癒されるルキナだったが…
ルキナもエリーゼにせがまれ一緒に風呂へと入ることになる…
そんな彼女たちが楽しい一時を過ごしている間に…
街の広場では着々とカムイ達を歓迎する準備が整っていく…

「カムイ様 エリーゼ様 ルキナ様…お待たせいたしました！」

突然、3人が休んでいる部屋の扉がノックされた

「はい？何でしょうか…？」

「ようやく準備が整いましたのでぜひ広場にお越しください！」

「準備…？ 一体何の準備でしょうか？」

カムイの問いに答えることなく男はすぐに立ち去ってしまった
その話を聞いていたルキナは窓から広場のほうを見下ろす…
広場には大勢の男たちが集まっており、
何やら大いに盛り上がりを見せていた

「…何かお祭りでもあるのでしょうか？ いえ…あれはっ!？」

通りから広場へと巨大な体をした怪物が
鎖に繋がれ運ばれてくる様子が見えた

「あれって…ノスフェラトゥだよっ！」

「のすふうえらおとう…ですか？」

「はい、あれは…私たちの世界の敵…邪悪な怪物…なぜここにっ？」

カムイの頭に苦い記憶が蘇る…かつての世界でノスフェラトゥに犯され
処女を奪われたあの忌まわしい記憶が…

「あれは危険な怪物です…この街はおそらく…すでに敵の手中に。」

「すぐに脱出しましょう！」

「うう、こんなことになるなんてっ…。」

3人はすぐに装備を纏め宿から飛び出し街からの脱出を試みる…
しかし、宿は既に大勢の男たちで囲まれており
正面からの脱出は不可能であった

「仕方ありません、屋根伝いに進みましょうっ！」

「えええっ、そんなの無理だよっ！？」

「大丈夫エリーゼ…私たちがついていきます！！」

屋根へと飛び移り足場の悪い場所を屋根伝いに進んでいく…
ヒールの高いブーツを履いていたエリーゼはかなり辛そうだったが
カムイとルキナに支えられ何とか進むことができた

「はあ…はあ…はやくマークスお兄ちゃんたちに知らせないとっ！」

「ええ…でも兄さまたちが今どこにいるのか…。」

妹たちの安全の為に先に偵察に出ている二人の兄…
おそらく徹底的な安全確認を行っている為に
森の中から洞窟の中までしらみつぶしにしていることだろう…
リョウマ達をこちらから探し出すことは難しかった

「おい、あそこにいたぞ〜！」

屋根の上に隠れる3人の姿を市民たちが発見した…

「見…見つかりましたっ！」

「仕方ありません…私が彼らの注意を引きます…二人はその隙に…！」

「そ…そんなことできないよっ！ ルキナさんも一緒につ！」

「心配はいりません、エリーゼさん達はその隙に馬を…。」

「そっか、私の馬に乗ってルキナさんを迎えにいけば…！」

「はい、皆で脱出できると思います…

幸いにも街の入り口はまだ封鎖されていません。」

男たちは街の広場で騒いでいるだけで、街を封鎖する様子はなかった
その目的はまだ不明であったが

「偽物」と勘違いされている可能性が高い…

もし捕まれば…

どんな目に合うか想像しただけで背筋が凍る思いがした

ルキナは二人と別れ一人で路地裏へと降り立ち

男たちの注意を引きながら複雑に入り組んだ路地を軽やかに走り出した

「ルキナ様あ、なんで逃げるんですかあ〜！！」

ルキナを追う男たちの声を聴き…

やはり偽物と勘違いされていることを確信したルキナだった

「さあ、私達はエリーゼの馬のところへ…。」

「うんっ！」

カムイとエリーゼは慎重に足を進めていった

人通りの少ない場所を狙い屋根伝いに進んでいった

「…このあたりの町並みは…かなり古いですね…。」

「なんだか今にも崩れそう…。」

街中心部の華やかな建物とは違い西側は貧しい人々が暮らす地域らしく建物の様子がガラリと変わっていた

「きゃああっ!？」

「エリーゼッ!？」

エリーゼが飛び移った屋根が音を立てて崩れ
エリーゼは建物の中へ落下していった

「いったあ〜い!!」

「エリーゼ、怪我はありませんかっ!？」

「…あ、大丈夫みたい! ベッドの上に落ちたから何ともなかったよ。」

「もう…脅かさなさいてください!」

エリーゼが落ちた場所は幸運にもベッドの上で
エリーゼには怪我もなかった
しかし…

その悲鳴を聞きつけた男たちがカムイ達の元へと
集まってくる足音が路地裏に響いていた

「…エリーゼはそこに隠れていてっ…隙を見て馬のところへ…!」

「……………そんなカムイお姉ちゃん…!」

カムイの覚悟を感じたエリーゼは言い争うことなくカムイに従った
エリーゼを守るために
カムイは男たちの注意を引き付けながら走り出していった

「うう、早く馬に乗ってお姉ちゃんたちを助けにいかなくちゃっ…！」

一人で心細く不安そうな表情を浮かべるエリーゼ
外の様子をそっと伺うと…
男たちが3人の行方を搜索している様子が見えた

「まだ…出るのは危険そう…。」

「おや、こんなところにいたんですか？ エリーゼ様。」

「きゃあっ！？」

エリーゼの背後に二人の男が立っていた

「ははは、これで俺たちの勝ちですね！」

「勝ち…勝ちってなんのこと…！？」

「忘れたんですか？ この前いらしたときに…。」

男は数日前に…偽物の英雄たちが訪れた時のことを語り出した…
カムイ エリーゼ ルキナを含む数人の英雄が訪れ
街の男たちと一晩中楽しいセックスを繰り広げたこと…

そして次に訪れる時には…
自分たちを捕まえた男にその身を捧げると約束したことを…

「わ…私の偽物がそんなことをっ…！？」

「偽物…よくわかりませんが、約束通り俺のモノになってもらいますよっ！」

「いやああああっ…来ないでえっ！！」

エリーゼへと飛びつき強引にベッドへと押し倒す男

服を引き裂きその白い肌を舐め回し強引にキスを交わす…

「うっ…うええっ…!？」

男の悪臭に耐え切れないエリーゼ…だが
男の舌はエリーゼの口内へと侵入し舐めまわしてくる

男の肉棒はみるみる勃起していった…

自分の何倍もの年齢の男が肌を撫でまわし
下着の上から秘部を激しく舐め回す

「ひあああああっ!!!!????」

全身を震わせ敏感に反応してしまうエリーゼ
男に下着を見られたことも秘部を弄ばれたことも初めての経験であった

「ああ、たまらねえ…エリーゼ様…俺のをしゃぶってくださいっ！」

「いっ…いや…こんな汚いものっ…!!」

「絶対に気に入りますって…お好きなアレを塗り込んでおきました！」

「…アレって…いやあ、んぐっ!!!!????」

口に強引に肉棒を押し込まれたエリーゼ
喉の奥まで肉棒が入り込むと…エリーゼの全身が熱くなった…

「んんんっ!!!!??」

男の話していた「アレ」とは…
フードの男から与えられた「異界の媚薬」であった

媚薬の力でエリーゼの体に起きた変化…
全身がより敏感になり秘部から愛液が溢れ出し
下着がぐっしょりと湿りはじめる
その効果は男にも及んでおり溢れる性欲が止まらなかった…

「ああ、エリーゼ様…俺のもお願いしますよっ！」

「ぬ…濡らしちゃった……なんで…体がおかしいとっ…!？」

もう一人の男も肉棒をエリーゼの口元へと差し出し
強引に順番に肉棒を口内へと押し込んでいく…
エリーゼは苦しそうな表情を浮かべながらも…自分に起きた変化に驚く
先程まで臭くてたまらなかった男の臭いが気にならなくなり…
口内にあふれる肉棒の味が…楽しめるようになっていた

困惑するエリーゼ…
どうしたらいいのかわからず、
ただ男たちの言いなりになることしかできない

「ああ…もう我慢できません…
エリーゼ様中に挿れさせてもらいますよっ！！」

「えっ…そ…それはダメエツ…！！！」

男に体を引き寄せられ強引に上へと跨る…
肉棒がエリーゼの秘部へと密着する

「あっ…あああ！！まだ私っ…処女だからっ…だからやめてっ！！」

「何言ってるんですか…このまえは散々やりまくってたくせにっ…！」

「嘘っ…偽物の私って…そんなっ…あああああああっ！！！！？？？」

エリーゼの膣内に男の肉棒がゆっくりと入り込んでいった
全身から汗が溢れ涙を浮かべるエリーゼ…

しかし…媚薬の効果か…苦痛はまったく感じられなかった

「あはああ、入っちゃった…中に入ってるよおおっ！！！」

処女を奪われたことに嘆くエリーゼだったが…

「さあ、激しくいきますよっ！！」

「あああああっあっ…いやっ…
セックスってこんなに気持ちいいのっ…！？」



男に激しく肉棒で突かれ小さな乳房を揺らすエリーゼ…
その体で感じていたのは…快樂だけであった

「ダメェツ…激しすぎるよお!! また漏らしちゃうっ!!!」

男の上で潮を噴くエリーゼ…体を震わせ喘ぎ声を上げる

「さあ、エリーゼ様こっちも…お願いしますよっ!!」

「あっ…はあっ…うんっ…!!?」

美し出された肉棒に白ら手を終わらせるエリーゼ…

「ええ、エリーゼ様最高です…もう限界だ…中に出していいですよ？」

「あはっ…中に出されたら…妊娠しちゃうよっ…！」

「大丈夫です、すごく気持ちいいですよっ！」

「気持ち良いのっ…出して…私の中に出してっ…！！」

自ら腰を振り男たちに中出しを求めるエリーゼ

「あっ…あああ…中が…熱くなって…ああああああ！！！！??」

エリーゼの子宮に大量の精液が射精された



同時に口内の肉棒を射精をはじめ
溢れた精液がエリーゼの顔へと降りかかる

「あっ…あああっ……！??」

初めての中出し…そして口内射精

「あっ…すごい…きもちいい…よ…精液…おいしい…っ…。」

射精を終えたばかりの男の上でさらに自ら腰を振りだしたエリーゼ

「も…もっと…もっときもちよくなりたいっ……！」

「はあ…はあ…もちろん…これからもっと気持ちよくなりましょう…。」

～路地裏のルキナ～

「はあ…はあ…二人は無事に…逃げ切れたのでしょうか…？」

路地裏で息を切らしたルキナ…

執拗に追いつける男たちから逃れるのは大変なことだった

「それにしても…約束とはなんでしょうか…私の偽物が関わって…。」

ルキナを追う男たちは「約束通り…」「約束したでしょ…」

そう繰り返していた

何を約束したかはわからなかったが…捕まったら最後だと感じていた…

「そろそろ二人も馬を手に入れた頃…探したほうがよさそうですね。」

ルキナはカムイとエリーゼとの合流を目指し路地裏を進んでいった…
しかし…

そんなルキナの行く手を遮る複数の影があった…

ルキナの前に立ちふさがったのは…
頭部から角が生えた犬のような怪物であった

「これは…この世界の生物ではありませんね…！！」

ノスフェラトゥ同様に異界から連れてこられた怪物であろう…
剣を構え怪物と戦う決意を固めたルキナ…だが…

「こ…この怪物は…まさか…発情しているのですかっ！？」

ルキナへと迫る怪物たちは…
どれも股間を膨らませ激しく興奮していた
周囲に群がるその怪物たちの狙いが
自分との交尾だと気付いてしまったルキナは
手が震えるほどに動揺してしまっていた

「ま…まずい…冷静にならないとっ…！」

冷静さを取り戻そうと集中するルキナだったが…
その視線は怪物の股間へと向いてしまう…
そして…それを見ていると不思議なほどに体が熱く…
ムラムラとした気分させられた

「な…なぜ私は…こんなに興奮を抑えきれないの…ですか…っ！？」

何かがおかしい…自分の体の異常に気付いたルキナ…
その時…思い当たったのは…

囮となり男たちから逃げ回っている時…
絶対絶命のピンチを救ってくれた老人…
僅かな間だったが…小屋の中にかくまってもらい、一杯の水を頂いた…

「まさか…あの水に何か…っ…毒がっ…！？」

「ふおっふおっふお…毒ではない安心なされ…。」

「あ、あなたはあの時の…老人…私に何を飲ませたのですかっ！？」

「あの方から頂いた媚薬をちょっと…な…。」

ルキナへと近づいていく老人…剣を構えるルキナだったが…

「あああああっ！！！？？」

老人はルキナの秘部を服の上からそっと撫でた
それだけでルキナは両手の力が抜け剣を落としてしまった

「ふむ…話に聞いていた以上の効果じゃな…どれ…。」

老人は服の隙間から手を潜り込ませルキナの体を撫で始めた

「きゃあっ…！！？」

ああっ…ダメっ…体がっ…敏感になってるっ…！！？」

触れられただけで全身に電気が走ったかのような刺激が走る
全身が性器になったかのような敏感さを見せる中…
老人にいい様に体を触られるルキナ…

しかし…ルキナは抵抗することができなかった
体を触られることが…経験したことのないほどに快感だったからだ

耐え切れないルキナは服を身に着けたまま愛液を垂れ流し
股間部には大きな染みができてしまっていた

「さて…ルキナ王女よ…

ワシにはもうお前さんを満足させることはできんが…
こいつらなら…それができるぞ？」

「え…この怪物たちが…？」

「ふむ…この快樂をもっと楽しみたいのであれば…
その服を脱ぎこいつらの前にひざまずくのじゃ…。」

「……………そんなことできるわけ…あっ！！！？？」

老人に尻を撫でまわされると…さらに愛液が溢れ出してくる…
ルキナは溢れる性欲を抑えきれない…

「……………。」

自分で自分が制御できなくなっていた…ルキナは自然と服を脱ぎだし…
ひざまずき…丸出しになった尻を怪物の方へ向けた

「ほう…良い尻をしておる…さあ望んだ快楽をあたえてやろう…。」

「くっ…私は…いったいなにを…あっ舐めないでっ！！??」

怪物はルキナの尻へと鼻を押し当て…匂いを嗅ぐと 舌を伸ばし
激しい舌使いでルキナの秘部を舐め回し始めた

「あっ…あああああああっ！！????」

あまりの快楽に喘ぎ身を悶えるルキナ
怪物の舌が膣内まで侵入し中を掻き回してくる

「あっ…ああっ…た…耐え切れません…
こんな気持ちよくてっ…！！ あはああっ！！！！」

潮を吹き体で喜びを表すルキナ…
そして…

怪物はルキナの上へと覆いかぶさり…肉棒を秘部へとぐっと押し当てる

「ううっ…は…はやく…挿れてくださいっ……！！」

自ら肉棒を求めだしたルキナ…

「ああああああ、入ったっ…私の中に…太いものがっ…！！！！??」



あはああっ！
私の…私の中に獣の…入ってっ…
私のっ！
か…体がおかしいですっ…!!
こんなに気持ちいいなんてっ…!!

挿入するとすぐ怪物は激しく腰を振りルキナと交尾を開始した

「あああああああっっ！！！！????」

その瞬間再び潮を噴き上げるルキナ…

顔を真っ赤に染め驚いた表情で喘ぐルキナ…

怪物との交尾がこれほど気持ちよいものと…初めて気づかされた

「きもちいいっ…ですっ…こんなにつすごいなんてっ！！！」

快楽に魅了されるルキナ…

「ほら…こいつらも気持ちよくしてやらんか…？」

「ああああっ…すごい…これが…私の中に入ってるんですねっ…！」

愛おしそうな目で肉棒を見つめるルキナ…そして
ルキナは躊躇うことなく肉棒を口に運び
…音を立てて味わった

巨大な肉棒がルキナの喉の奥にまで押し込まれると
ルキナは苦しそうな表情を浮かべた
路地裏で怪物と繋がったルキナ王女…
その姿はもはや偽物の淫乱な英雄たちと何も変わらない姿となっていた

「あはあっ…すごいっ…こんなに…精液を口の中に出されました…！」

口内で射精され嬉しそうにほほ笑むルキナ…
自ら肉棒を再びしゃぶりさらに味わう…

「ああっ…この子…もう私の中で射精したいみたいですっ！！」

「そうかそうか、たっぷり出してもらいなさい…！」

「で、でも…もっと気持ちよく繋がってたいですっ！！！」

「心配はいらん…こいつらは性欲旺盛じゃ…
一度の交尾で何度も射精するわい。」

「ああっ…すごいこんな素敵なことを何度もっ……！！」

うっとりとした表情で交尾に酔いしれるルキナ…

「あああああっ…すごいこんなにつっ…
たくさん私の中に射精してますっ！！！」



怪物に中出しされガクガクと体を痙攣させるルキナ…
再び肉棒を啜え…口内にも大量の精液が溢れる…

「あっ…ああっ…すごい…これは…やみつきになります…」

～広場…カムイ～

「いやあ…離してくださいっ！！！」

エリーゼを逃がす為に囿となったカムイだったが…
男たちに囿まれついにその手に落ちてしまった

「いやあ、カムイ様…相変わらず良い胸をしていらしゃる…！」

鎧と服を脱がされ乳房を丸出しにしたカムイ
男たちは遠慮することなくその乳房を弄んでいた

「さ…触らないでっ…こんなことして…許しませんよっ！！！」

無礼な市民たちに怒るカムイだったが…
市民たちはそんなカムイの言葉を真剣に受け止めようとはしない

「ではカムイ様…こちらへ…
約束通りお望みのモノを用意しておきましたよ。」

「望みのモノ…私は何も望んでなど…っ…！？」

乳房と下着を丸出しにしたまま…広場の中心へと案内されるカムイ…
男たちに囿まれ必死に体を隠すカムイ…

「いやっ…見ないでくださいっ…！！！」

「さあ、カムイ様！　いかがです！？」

「こ…これはっ！！？」

カムイの目の前に現れたのは…宿から見えた「ノスフェラトゥ」であった
反り立った肉棒は既に我慢の限界といった様子で…
カムイとの交尾を待ち望んでいるようであった

「そ…そんなっ…まさかまた…こいつと…。」

ノスフェラトゥに襲われた過去のトラウマが蘇るカムイ…
しかも…

「きゃあっ…やめてっ…いや、何を塗っているのですかっ！！？」

下着の中に男の手が潜り込み…秘部に何かを念入りに塗り出す…
さらにカムイの全身に…男たちは何かを塗っていった…

「あぁっ…こ…これって…！？？」

「カムイ様がお気に入りの媚薬でございますよ。」

「媚薬…そんな…っ！？」

媚薬はすぐに効能を発揮し、カムイの体を蝕んでいった

「あはあああああっ！！！！！？？」

体の変化に耐え切れずうずくまってしまうカムイ
熱くなる体と溢れしてきた性欲…
自分を見つめる人々の視線すら心地よく感じ始めていた

「カムイお姉ちゃん！」

「エ、エリーゼ…！？」

目の前には全裸のままカムイを見つめるエリーゼの姿があった

「ど…どうして裸なの…エリーゼ…！？」

「このほうがすっごく良い気分だよ？ カムイお姉ちゃんもやってみて！」

「そうです、カムイさんも一緒に楽しみましょうよ！」

「ル…ルキナさんっ！？」

全裸で並んだルキナとエリーゼ…

男たちに体を触られうっとりとした表情を浮かべる…

媚薬の力で全てを受け入れてしまった二人…

この二人が偽物だと思いたいカムイだったが

それは紛れもなく本物の二人であった…

それを本能的に察知したカムイは頭の中が真っ白になっていった

「な、なにがなんだか…頭が真っ白に……。」

目の前の二人が現実だとは思えず混乱するカムイ

「みなさん、カムイさんも気持ちよくしてあげてくださいっ！」

ルキナの声で…男たちはカムイをノスフェラトゥの元へと抱え運び出す

「いっいやっ…それだけはっ！！！！？」

ノスフェラトゥは待ちきれないと言った様子で

カムイの体へと手を伸ばし…

両足を抱えるとすぐに肉棒をカムイの秘部へと押し当て

挿入させようとしてきた

「あああああっ…無理っ…こんなの…前のよりずっと大きいっ！！！！！！？」

以前に襲われた個体よりも巨大な肉棒…

それが…じわじわとカムイの膣内へと入り込んでいく…

「あがああああっ！！！！！！？」



いやあつ!!
みんな…見ないでえっ!!
あああつ
奥まで入ってきてるうっ…!!

一気にノスフェラトゥの肉棒はカムイの膣内の奥にまで挿入された

「いっ…いやあ…こんなのっ…あああああ!!!??」

過去の苦い記憶がよみがえり…まだ抵抗の意志が残るカムイ…だがカムイの体は敏感な反応を見せてしまう…

挿入された快感で潮を噴き上げるカムイ
大勢の男たちがその様子を見て歓声を上げていた

「ああ、見ないで…私のこんな姿っ……！！？」

男たちに向け両足を開き

ノスフェラトゥと繋がった秘部を見せつけるカムイ

耐えがたい屈辱のはずなのに…激しく興奮し見られる快感が押し寄せる

「ああ、私見られてる…みなさんに…私の恥ずかしい姿…っ…！！？」

激しくカムイと交尾を繰り返すノスフェラトゥ

豊満な乳房を大きく揺らしながら喘ぎ、快楽に悶えるカムイ…

「ああああダメェ…気持ちよくてっ…私っ…！！？？？」

屈辱よりも次第に快感が勝っていくカムイ…

そして…

「ああああああ、出てる…中につ…！！？？？」

ノスフェラトゥは媚薬の力で大量の精液をカムイの子宮へと射精した
みるみる膨らんでいくカムイの腹部…

その瞬間…カムイの中の屈辱感は消え…快楽がすべてとなった



「あはあああ…お…おなかが…たくさんでてます…っ…!？」

肉棒が引き抜かれ大量の精液が逆流しカムイの秘部から放出された…

「ああああああっ!!!??？」

精液に塗れたカムイは…自ら肉棒を求め始める…

「ああああ…もう一度…私の中に出して…お願い…しますっ…!!!」

ノスフェラトゥとの交尾に目覚めてしまったカムイ…

その人間相手では決して味わうことのできない快樂の虜となっていた…

そんなカムイ達を見下ろすフードを被った男…

「これで特務機関はボロボロだな…

準備は整った…最後の仕上げといこう…。」

4章 もう一人の召喚士

カムイ エリーゼ ルキナが
リョウマ マークスと共に出発してから数日
彼らから連絡はなくその行方まで不明となっていた

「うう、いったいどうしたら…。」

各地で英雄たちが次々に姿を消していき…
特務機関本部に残されている英雄は
本部防衛のために最低限残されている者のみと
偽物が出現したことで外出禁止となっている
カミラやリンたちだけとなっていた

アルフォンスとシャロンそして召喚士の少女は
この状況を打開するために
新たな英雄を召喚しその力を借りるかどう…議論していた

「今英雄を召喚しても…危険なだけじゃないでしょうか？」

召喚士は呼び出した英雄がまた敵の手に堕ちることを心配していた

「だけど、僕たちに残された手段は…もう他に無い。」

残されている英雄たちを総動員してもフードの男の正体はおろか…
行方不明となった英雄たちを見つけ出すことも難しく
そこから新たな犠牲者が生まれる可能性は高い

もし本部が敵の手に落ちてしまえば…完全な敗北となる…
それを避けるためにも残された英雄たちには
全力で特務機関を守ってもらわなくてはならない

「召喚士様…今ならどれくらいの英雄さんを召喚することができますか？」

「ええと…かなりオーブの力が溜まってきていますので…
5人はいけるかと思えます。」

「5人か…危険を避けるためにも
召喚したらすぐ本部へと帰還すればどうかな？」

「そうですね、今は新しい英雄さんたちの力を借りて…

行き詰った特務機関は最後の手段として
新たな英雄たちに力を求めることに決めた
しかし、英雄たちを召喚するには…
召喚士が神器を持ち召喚の座へと赴かなければならない
その場所までは多少の距離があるが…
大勢で行動すれば危険が大きくなるために
シャロンが召喚士と共に少数で密かに向かうことに決まった

向かう道中…敵と遭遇しないよう細心の注意を払い
進んでいくシャロンと召喚士
人目を避けるために、夜のうちに出発し…
街道を避け獣道を抜け…昼過ぎには目的地へと到着することができた

「はあ、はあ…到着しましたよ！ 召喚士様！」

「ようやくですね…さすがに疲れましたが、休んでいる暇はありません！」

「はい…申し訳ないのですが、すぐにお願ひします！」

この場所に召喚士がいるだけで敵の注意を引く可能性が高く
シャロンが周囲に敵の姿がないことを確認すると
召喚士はすぐに召喚の儀式を開始したのであった

「……………」

「毎回…この瞬間はわくわくしてしまいますねっ！」

どんな英雄がやってくるのか目を輝かせるシャロン…だが

「あれ…何か変です…私の…神器が反応しません…。」

「え、それって…どういうことでしょうか…??」

召喚する際に光り輝く神器だが…今は何の反応も見せようとはしない…
何かがおかしいと感じ…
すぐにこの場から離れようとするシャロンと召喚士だったが

「残念だが…もう手遅れだ…。」

「えっ！？ あなたはっ！????」

「そんな…私と同じ服…？」

「召喚士様のファンでしょうか？」

「違います…私には感じます……この人も私と同じ召喚士…。」

「えっ！？」

召喚士の少女と同じ服を纏った男…
そしてその手には…同じ神器が握られていた

「既に俺が召喚の儀式を一段階開始している…、
儀式の途中で割り込むことはできないのだ。」

「ということは…この人も本物の召喚士…??」

「あなたは…何者ですか…。」

「俺もお前と同じ召喚士さ……別の異界からやってきたがな。」

「えっ…！？」

「そんなっ…召喚士が別の異界からっ…??」

もう一人の召喚士が異界からやってきたことを知り
驚愕するシャロンと召喚士

召喚士は合図を送り

その合図で何人もの兵士がシャロンと召喚士へと襲い掛かったのであった

「きゃあああっ！！??」

「召喚士様っ！？」

兵士は召喚士を拘束するとどこかへと連れ去っていった

「召喚士様に何をやる気ですかっ！？」

「俺と同じ力を持つ女は危険だからな…。」

召喚士である男は…同じ召喚士である少女の力を恐れているようだった

「あなたの目的は…何なのですか…？」

「俺の目的の1つは…お前だよシャロン…。」

「私っ…私が…？」

非道な行いにより自分のいた異界より追放された召喚士…

その際に出会った異界を渡る力を持つ男の助力により

様々な異界を渡り歩いてきた…

そして辿り着いたのは…

淫乱な乱れた英雄たちが溢れる…乱れた異界であった

その異界で召喚士たちは英雄たちと大いに気が合い

様々な英雄たちと関係を持つことに成功し地位を築いていった…が

仮面を被った「マルス」と名乗る剣士の出現により窮地に立たされる…

凄まじい剣の腕と人々を導くその輝きにより、

英雄たちは光を取り戻し…世界に変化をもたらした

追い込まれた召喚士は自分に従う英雄たちを引き連れ異界の扉を再び潜り

この異界へとやってきたのであった…

そしてこの異界に新たな楽園を築くために…
その乱れた異界で手に入れた強力な「媚薬」を用い
英雄たちを墮落させてきたのだった

「ひどい…！？ それに何で私を…？」

乱れた異界で最後まで抵抗を続け墮落していなかったのが
…シャロンとアルフォンスの兄妹であった
人々を導き英雄たちを引き付ける不思議な魅力を持った兄妹は
召喚士にとって厄介な存在であった
仮面マルスと合流した兄妹は瞬く間に英雄たちをまとめ上げ
召喚士を追い詰めていった
召喚士は形勢を逆転させるためにシャロンを捕らえ
墮落させることに成功したのだが…
それが逆に英雄たちがより纏まるきっかけとなってしまった…
残りわずかとなった手駒の英雄たちを率い
召喚士は異界の門を潜ったのであった…

召喚士にとってシャロンは因縁の相手であり、
その光り輝く決意を持った瞳が最も憎かった

「…私は…私は何をされようとも…墮落したりしませんっ！！」

「そうだな…お前は手ごわい…だから今回は違う手で攻めることにする！」
「えっ…いやあ、触らないで…っ！！！」

召喚士はシャロンの下着を下ろすと…大量の媚薬をその秘部に塗り込んだ

「あっ…あああああっ！！！！」

激しく刺激され身を悶えるシャロン…
媚薬の力により体に変化が起き始める…

「あああああっ…あそこが…熱い…体まで…熱くなってくるっ…！？」

「いい気分だろう…？そこで英雄たちが楽しむ様子を見ているがいい…！」

「きゅんっ！！？」

召喚士の合図で連れて来られた一人の少女…
それは…異界の英雄「ティルテュ」であった
フリージ家の公女で聖戦士の地を引く末裔であったが…
その顔は赤く染まり息が荒く様子がおかしかった

「そ…その子に何をしたんですかっ!？」

声を上げるシャロンだが…

ティルテュの行動を見て驚愕する

兵士の肉棒をパンツの上から愛おしそうに撫で…

その肉棒を自ら手に取ると…音を立てて嬉しそうにしゃぶり始めた

「ああ、お願いします…私の中に…もう我慢できませんっ!!」

肉棒をねだり始めるティルテュ

兵士が肉棒を秘部に押し当て一気に膣内へと挿入させると

「あはあああああっ!!!??」

喘ぎ声を上げ全身で喜びを表すように…身を悶える



「ああああ、もっと…もっと激しくお願いしますっ！！！」
前後から肉棒で攻められるティルテュを見て
呆然としてしまうシャロン…
体がより熱くなり秘部から愛液が溢れ出していた

「どうだ…ティルテュは二日前に召喚したばかりの英雄だ…
それがもうこんな姿だ。」

「二日前に…一体何をしたのっ…!？」
「お前に塗ったものと同じ媚薬を与えたただけだ…
かなり量は少なかったんだが…シャロンはいつまで持つかな？」

「そんなっ…うっ……!？」
媚薬を大量に…膣内にまで塗り込まれたシャロン…
召喚士に肩を触られたただけでも…気持ちが高ぶり愛液が噴き出す…

「おや…？ もう欲しくなったのか？ 犯して欲しいんだろ？」

「ち…ちがう…欲しくなんて…っ！！」

「あはあああああっあっ！！！！！！??」



シャロンの前の前で中出しされ精液を浴びるティルテュ…
肉棒にしゃぶりつき精液を笑顔で飲み込むその姿に…
シャロンの目は釘付けになっていた

「さて…お次は…新たな英雄を召喚して見せよう…！」

「えっ…！？」

召喚士が神器を構えると…神器は光り輝き…大地が震えた
辺りが光に包まれ…その中から一人の少女が姿を現したのであった

「……ここは…？」

「ほう、リリーナか…これは大当たりだなっ！」

「大当たり…？あなたは一体…えっ…何が起きているのっ！？」

リリーナの目の前で肉棒に夢中で吸い付くティルテュと…
その横で必死に股間を抑え耐えるシャロン…

状況を理解できずに啞然とするリリーナ…

「取り押さえろっ！」

「きゃあっ…な…何をするのっ！？？」

召喚士の命令でリリーナを取り押さえる兵士たち…

「さて…さっそくりリーナの体を拝見させてもらおうか…！」

「体…って…いやあ…そんなところっ触らないでっ！！！？」

リリーナの服を破り乳房を露出させた召喚士…
秘部まで露出したリリーナは涙を流し顔を真っ赤に染めていた

泣き叫ぶリリーナの体に…召喚士はたつぷりと媚薬を塗り込んでいく

リリーナの体のあらゆる場所に塗り込まれた媚薬…
悲鳴を上げるリリーナだったが…シャロンと同様に一気に体が熱くなり
秘部から大量の愛液が滴り落ちていた

「あっ…あああっ…!？」

その場に座り込んでしまったリリーナ…そして…

「しっかりと見ているよシャロン…。」

「だ…だめ…やめてっ…!」

リリーナを押し倒しその体を撫でまわす召喚士…
触られただけでリリーナは全身に快楽を感じ声を上げてしまう

「あはああああっ!!!!??」

乳房を揉まれ秘部を弄ばれると…リリーナはすぐに大量の潮を噴き上げ
うっとりとした顔で快楽に浸ってしまう

「だ…だめ…こんな…気持ちいい……。」

召喚士にキスをされ舌を絡ませられると…
リリーナは一瞬苦しそうな表情を見せたが
絡ませる舌の感触までもが快感に感じられた…

いつの間にか自分から夢中で舌を絡めているリリーナ…そして…

「あっ…そこっ…そこはダメですっ…!」

「心配するな…ここが一番気持ちよくなれるんだ…っ…。」

「気持ちよく…なれる……。」

処女のリリーナは肉棒を押し当てられると咄嗟に手を伸ばしてしまったが
気持ちいいという言葉聞きその手を戻した…

「あっ…ああああ…入って…きてる…あああああああっ!!!!!!!!!!!!」



初めてのセックスに驚き叫ぶリリーナ…
肉棒が膣内を刺激する感覚は…想像を超えた快感であった…

腰の動きは次第に激しくなっていく…リリーナは何度も潮を吹きあげた

「あっ…あああああつ…あつ…!!!??」

その様子を見ていたシャロンは…いつの間にか自慰行為に浸っていた

「あっ…あああつ…!!!?」

潮を噴き上げ体を震わせるシャロン…

「だ…だめ…手が勝手に…私の体…どうなっちゃったの…?」

シャロンが性欲に屈しそうになっていた時…

突然…目の前の空間が歪み…異界の扉が開いた…

「えっ…!？」

「なんだとっ…!？」

突然の出来事に召喚士も動揺を隠せない…

そして…その扉の中から姿を現したのは…

仮面を付け花嫁衣裳を身にまとった…ルキナであった

その場違いな衣装に召喚士はおろかシャロンも言葉を失ってしまう

「召喚士…ようやく見つけたぞっ!!」

「お…お前…仮面マルス…いや……ルキナか？」

「ちがう、僕はマルス！ やはりこの異界でも英雄たちを…
すぐにリリーナを離すんだっ！」

剣を召喚士に向けるルキナ…

召喚士にとってもう一人の憎き天敵ともいえる仮面マルスの出現…

絶対絶命のピンチであると同時に…

これは復讐を果たすチャンスでもあった

「ルキナさん…なんて格好をしているんですかっ…っ…あっ…!？」

「シャロンさんっ!？ 無事ですね…いえ無事じゃないのでしょうか…？
それに私はルキナではなくっ マルスです!!」

乱れた異界から召喚士を追いかけてきた「仮面マルス」こと「花嫁ルキナ」
ルキナではなくあくまでマルスだと言い張っている…

召喚士の手下を欺くために花嫁の衣装を纏い変装したつもりのようだが…
ドレスに仮面という異様な姿だとうことに本人は気付いていない

「…しょ…召喚士が私に…媚薬を……それでっ！！」

「なんと言う事を…もはや許すこともできませんね、覚悟しなさいっ！！」

「そ…そうはいかん…これが見えないのかっ…
余計な事をすれば…リリーナを孕ませてやるぞっ！」

「くっ…なんて卑怯なっ…！！」

動揺した召喚士は簡単に射精できる状況ではなかったが
真面目なルキナはリリーナを救いたい気持ちが強く
そのハツタリに乗ってしまう…
召喚士の言うままに…剣を捨て兵士たちに取り押さえられるルキナ…
数分早くこの異界に来ていれば…状況は大きく変わっていたはずだった…

「ようやくお前にも復讐する機会がやってきたな…
仮面マルス…いや、ルキナ！」

「なぜ私の正体を…しかし、私は決してあなたには屈しません…！」

「まあ、まずはこの娘を孕ませるところをしっかりと見ている…！」

「や…やめてっ…やめなさいっ！！！」

「あああああっあっ！！！！」

再び肉棒を挿入されたリリーナは抵抗することも無かった
押し寄せた快感に喘ぎ自ら腰を振り始めているリリーナ

召喚士も憎きルキナが見ているという状況に興奮したのか…
すぐに限界を迎えリリーナの子宮へと大量に射精してしまった



「あはあああつ...ああ、気持ちいいですっ.....あつ...!!」

召喚士に導かれるまま肉棒にしゃぶりつくリリースナ...
その様子を見てられないルキナと...
もはや性欲の限界に達しているシャロン

「さて...シャロン...今の気持ちはどうだ...?」

「はあ...はあ...私にも...くださいっ...欲しくてたまらないですっ!!」

召喚士は笑みを浮かべ...シャロンの元へと肉棒を差し出す...
シャロンは我慢できないといった様子で肉棒にしゃぶりつき...
激しく音を立てて喉の奥まで肉棒を啜えた

「シャロンさんっ！ダメですっ諦めないで！！」

「ルキナさん…ごめんなさい…私もう我慢できないんですっ！！」

「そんなっ……！？」

召喚士の上に跨り…肉棒を自ら秘部へと押し当て…挿入させるシャロン

「あはああああっ、すごいつ…すごいよっ…奥まで入ってるっ！！！」

召喚士の周りにはさらにリリーナ…テイルテュが歩み寄り
キスを交わし召喚士の体を丁寧に舐め始める…

「…例え私だけになろうとも…最後まで諦めませんっ！！」

「そうそう…ルキナに相応しい…
最高の相手がいるな…おい連れてこいっ！」

召喚士の言葉で…
兵士たちは黒い肌をした赤い目の光る男をルキナの前に連れてきた…

「これは…屍兵…いやっ…こいつだけはっ…！？」

屍兵に押し倒されすぐに肉棒を強引に挿入されるルキナ…

「うああああああっ…いっ…いやああっ！！！」



ま…待ってくださいっ!!
こんなことっ…
もう屍兵となんてっ…嫌ですっ!!
ああああああっ!!

召喚士の目の前で屍兵に犯されるルキナ…
召喚士はその様子を勝ち誇った笑顔で眺めていた

「これで…ようやく俺の敵はいなくなる…
お前がいつまで正気でいられるか試すとしよう…ふははははっ!!!」

悩まされていた敵さえも手中に収め完全な勝利を収めた召喚士だった
この異界は新たな時代を迎えることになる…

END

to be continued